

岸田 秀著

『ものぐさ精神分析』

『幻想を語る』

『嫉妬の時代』

森 雅裕著

『モーツァルトは子守唄を

歌わない』

—— “壊れた本能” と

“江戸川乱歩賞” ——

川崎絵都夫

東京都交響楽団のメンバーの方々と幼稚園での音楽会の仕事をするようになって三年。その度に園児達の無邪気な笑顔と、音を聴く真剣なまなざし、  
“子供達に良い音楽を聴かせたい”という先生方の情熱に、こちらの方が感動しながら編曲、作曲でお手伝いをしています。(その縁でこの原稿を頼まれたのですが、僕自身は、音楽そのもので受けた感動の方が、音楽書を読んで受けた感銘を大幅に上回っているので——あたり前かな?——音楽書の紹介は今回は、しない事にします。)

そして話は突然、大学時代に遡ります。

夕暮れのターミナル駅前の喫茶店で勤め帰りのサラリーマンに交じって、心理学や現代思想の話に夢中になっている青年二人。そのうちの一人が僕なのですが(?! )主に友人にレクチャーを受ける形で、何度となくそういった場をもちました。というのも、音楽における感動とは何だろう、という疑問

や、中学の頃からあった「人間」に対する興味などから、人間の基本的な精神の原理、成り立ち、人間の普通の普遍的な精神構造などを心理学者、思想家は、どう考えているのかを知りたくてたまらなかつたのです。まあ、その友人（心理学科）にしてみれば、人に教えながら自分でも考えをまとめたり、復習した、という部分もあったのでしょうが……

そしてその時に知ったいろいろな理論に、今ひとつ納得できなかった僕が、正に驚天動地、目を開かれた（人によっては目からウロコが落ちたりするアレです。）本が、岸田 秀氏の一連の著作でした。

「人間とは本能が壊れた動物である」

「全ては幻想である」

要は、これだけです。これを根本理念として人間に関するあらゆる事柄を説明してしまおうわけです。でもこれでは訳が分かりませんね。例えば「教育と必要悪である」これを岸田氏自身の言葉に少し補

足を交じえて説明すると……。（「内が岸田氏の文章」）

まず人間は何らかの理由により本能が壊れてしまった。正確には、本能を行動に移すための行動様式が壊れてしまった、とします。（これは、人間の直立歩行による生物学的早産が原因とする説もあります。つまり自らの本能に従って行動できるような身体が発達を整わないうちに生まれてしまう為、という訳ですが……）

そこで「本来の行動様式の代用品である行動形式を人為的につくって個人個人にはめこんだのが文化である。」そしてその文化の中にあつて、教育とは「本来、人間のもつさまざまな方向への可能性を摘み取り、押えつけて……人間を社会に役立つようなパターンに入れること」ゆえに、教育されている側からすると、「必要悪である」となります。しかしこれでは、ミもフタもない、という感じですよ。

岸田氏は、さらに「教育は必要悪なんだ……という

自覚があれば、教育者も子どもを教育するとき謙虚な気持ちで臨むでしょうし、強制に従わない生徒に對しても寛大な態度が取れるでしょう。また外れ者を許容するゆとりももてるでしょう。しかし子どものために教育してやっているんだ、この教育に従うことが子ども自身のためになるんだと思ひ込んだとたん、教育者は、子どもの気持ちを感じ理解するいっさいの可能性をみずから閉ざしているのです（「おまえのためにこんなに努力しているのに」と思うから、なぜ生徒が言うことを聞かないか、の理由がすべて見えなくなってしまうのです）」

と述べていて、ここに至って氏の、教育される側と子供たちへの深い愛情、共感、思い込みで何かを強制されることへの怒りが見てとれるのです。

氏はこのような調子で、前述の二つの基本理念を元に「性について」「何のために親は子を育てるか」「自己について」「怒りと憎しみ」「忙しい人とひまな人」など人間に関する事から、歴史・文化・

国家・言語の起源などの広い範囲について鋭く論じていきます。又、各分野の方々との対談集にも、伊丹十三氏との自我論的教育論など、興味深いものが多々あります。そして……。

欠点その一。あまりのめり込むと、全てが思ひ込みなんだ、と思ってしまう、何をするのも虚しくなること。（ただし、それも思い込みだ、ということに気づくと回復します）

その二、あまりにアッサリ断じてあるので、「そりゃそうだけど……あんまりじゃない!?」と言いたくなること。

その三。読者自身の心の中に人間に對する愛情や、情熱がない場合、単なる割り切りだけの、冷たい性格になってしまう危険があること。

効能（これは伊丹十三氏の言葉を引用します）

○気が楽になる。

○争いの心が消える。

○物事がクッキリと見える様になる。

さて、こう暑いのに頭を使う本を読んで疲れてしまったら、講談社文庫から出ている（予定の）森雅裕著『モーツァルトは子守唄を歌わない』をおすすめします。

この森雅裕氏とは、何の因果か、ではなくて縁か、大学時代に寮で相部屋でした。森氏は当時、いろいろな職業を転々としたあと、作家になる為の経験の一環と、学歴欲しさで、二十六歳にして大学に入学。周りの学生達の怠惰な生活に呆れ果てて怒りまくっており、とてもおっかない人でした。

しかし、そのような人が書いたとは思えないような、軽妙にして痛快な登場人物達が、縦横無尽に活躍する推理小説です。何せ、モーツァルトの死の謎をベートーヴェンと弟子のツェルニーが、掛け合い漫才的会話をしながら解いていく、という奇抜なもので、大変楽しめます。ちなみに作者は、この作品で第三十一回江戸川乱歩賞を受賞し、めでたく作家

として世に出、四畳半のアパートから3DKのマンションへ引っ越すことができたのです。（あやかりたい、あやかりたい）

（作曲家）

